見本

一本の傘

佐藤文子のあゆみ

昭和二十三年 — 令和八年

自分史レター

ま え が き

本書は、「自分史レター」が毎週一通お届けした質問メールに、お母様が一年かけて返信してくださった言葉をもとに、一冊にまとめたものです。全五十二問への回答が、そのまま五十二の物語になりました。

文章は読みやすく整えましたが、語り口も、記憶の曖昧なところも、脱線も、できるかぎりそのままにしてあります。それこそが、ほかの誰にも書けない、この人だけの歴史だからです。

どうぞ、ゆっくりお読みください。

※本書は品質確認用の見本です。登場する人物・出来事はすべて架空のものです。

目 次

第一章　川越の家

第二章　高校三年生

第三章　そろばんと帳簿

第四章　一本の傘

第五章　母になって

第六章　テレビがやって来た日

第七章　小さなごほうび

第八章　人生の節目に

第九章　あなたへ

付録　文体見本

第一章

川越の家

> 生まれた場所はどんなところでしたか？ 家のまわりの風景で覚えていることを教えてください。

私が生まれたのは、埼玉県の川越です。蔵造りの通りから少し外れた町で、家のまわりには畑がまだたくさん残っていました。少し歩けば新河岸川があって、夏は川べりで夕涼みをする人がおおぜいいたものです。

朝は納豆売りの声で目が覚めて、夕方にはお豆腐屋さんのラッパが聞こえる。いま思えば、音のにぎやかな町でした。

> 子どものころ、家族は何人でどんな暮らしでしたか？

家族は六人。父と母、二人の兄、姉がひとり、そして末っ子の私です。

父は建具職人で、家の隣がそのまま仕事場でした。朝から晩まで、かんなの音が家じゅうに響いていたのを覚えています。母は家で袋張りの内職をしていました。手先の器用な上の兄は、よく父の仕事を手伝わされていました。私と姉は母の袋張りの手伝いです。一枚いくらでお小遣いをくれるものですから、姉と競うようにやったものです。

> お父さん・お母さんはどんな人でしたか？

父は無口な人でした。仕事場では怖い顔をしているのに、湯呑みを差し入れに行くと、何も言わずに削りたてのかんな屑を一枚くれるのです。薄くて、向こうが透けて見えるほどのかんな屑です。あれが父なりの「ありがとう」だったのだと、大人になってから気がつきました。

母は反対に、よくしゃべる働き者でした。近所の困りごとを聞きつけては、うちのおかずを鍋ごと届けてしまう。「うちの分がなくなるよ」と姉が怒っても、「お互いさまだから」と笑っている人でした。

> 子どものころの家はどんな家でしたか？ 好きだった場所はどこですか？

平屋の日本家屋で、いつも木の匂いがしていました。仕事場から匂ってくるのです。

好きだったのは南向きの縁側です。冬でもそこだけは暖かくて、猫と一緒に日なたぼっこをしながら、姉とおはじきをしました。夕方になると母がそこで繕いものをしていて、私はその横で宿題をする。いちばん古い記憶は、たいていあの縁側の風景です。

小さいころ、どんな遊びに夢中でしたか？

遊びといえば、ゴム跳びとおはじきでした。近所の女の子たちと、日が暮れて手元が見えなくなるまで遊んでいました。

子どものころのお正月は、どんなふうに過ごしていましたか？

お正月は、暮れの二十八日ごろに親戚が集まって餅つきをするのが習わしでした。父が搗いて、母が返して。つきたてのお餅を大根おろしでいただくのが、何よりの楽しみでした。あんこは特別なときにしか出ない、ごちそうでした。

元日には父が神棚にお神酒とお供えをあげ、子どもたちはお年玉をもらいます。たしか、五十円だったでしょうか。姉とかるたを取り合ったのも、なつかしい思い出です。それに比べると、いまのお正月は静かなものですね。

子どものころに大人から言われて、今でも覚えている言葉はありますか？

父の「道具は手入れが半分」です。仕事場のかんなやのみを、父は仕事のあとに必ず手入れしてから仕舞っていました。子ども心に、遊び道具のおはじきまで並べて磨きたくなったものです。

台所でも、お勝手の包丁でも、この言葉はいまでも私の中に生きています。ものを大事にすれば、ものが応えてくれる。そういう意味だったのだと思います。

第 二 章

高 校 三 年 生

学生時代、得意だった科目と苦手だった科目は何でしたか？

得意は算数、それからそろばんです。そろばん塾には小学三年から通わせてもらいました。月謝を出すのは大変だったろうと思いますが、「手に職の元になるから」と母が通わせてくれたのです。

苦手は英語でした。いまでも横文字はどうも苦手です。孫にローマ字を教わる日が来るとは、思いもしませんでしたけれど。

印象に残っている先生はいますか？ どんな先生でしたか？

高校の担任だった田島先生です。数学の先生で、それは厳しい方でした。宿題を忘れると廊下で仁王立ちになって待っている。けれど、生徒の家の事情まで全部覚えていて、進路のときには一人ひとりに合う勤め先を、足を運んで探してくださる方でした。

私が信用金庫に入れたのも、田島先生が「佐藤はそろばんで食べていける」と推してくださったおかげです。頭が上がりません。

学生時代の親友はどんな人でしたか？ どうやって仲良くなりましたか？

幸子さん――さっちゃんです。もともとはゴム跳び仲間で、小学校も高校も一緒でした。私が石橋を叩いても渡らないたちなのに、さっちゃんは考えるより先に跳ぶ人で、よくもまあ喧嘩もせずに続いたものだと思います。

さっちゃんは結婚で群馬へ行きましたが、年賀状はいまも続いています。もう六十年をこえました。

学校の行事でいちばん覚えていることは何ですか？

高校の修学旅行です。夜行列車に乗って、京都と奈良へ行きました。生まれて初めての遠出です。枕を並べた宿で、消灯のあとまでさっちゃんたちとしゃべって、先生に叱られました。

清水の舞台から見た町の景色は、いまでも目に浮かびます。あのとき「いつかもう一度」と思ったきりになっているのが、心残りといえば心残りです。

十代のころ、夢中になっていたものは何ですか？

舟木一夫さんでした。「高校三年生」という歌が大流行して、私はラジオにかじりついて聴いていました。レコードなど買えませんから、姉と二人で歌詞を紙に書き写して覚えたものです。学校でも、みんなが歌っていました。

進路はどうやって決めましたか？ 迷いはありましたか？

いまの人には驚かれるかもしれませんが、迷いというものは、ほとんどありませんでした。当時、女の子は高校を出たら勤めに出て、家にお金を入れるのが当たり前でしたから。

ただ、田島先生が「進学させたら伸びる」と父に言ってくださったことは、あとから母に聞きました。父は黙って頭を下げたそうです。うちの暮らし向きでは無理な話でしたが、そう言ってもらえたことは、いまでも私の小さな誇りです。

第三章

そろばんと帳簿

初めての就職はどんな仕事でしたか？

高校を出ると、担任の先生のすすめで、川越の信用金庫に勤めました。そろばんが得意だったからです。窓口に立たせてもらえるまでは、毎朝そろばんの練習と、お札を数える練習ばかり。指にはめるゴムのサックが、いまでもなつかしく思い出されます。

初出勤の日のことを覚えていますか？

母が前の晩に制服のブラウスに火のしを当ててくれて、当日は姉が髪を結ってくれました。緊張のあまり、朝ごはんがのどを通らなかったのを覚えています。

初日にしたことといえば、お辞儀の練習と、先輩方へのご挨拶ばかり。帰り道、やっと肩の力が抜けて、急にお腹が空いてきて。家に着くなり、母が取っておいてくれた朝ごはんの残りをかき込みました。

初めてのお給料は何に使いましたか？

一万九千円だったか、二万円と少しだったか。正直、金額は忘れてしまいました。ただ、母に財布を買ったことは覚えています。残りは

「貯金しなさい」と言われて、郵便局へ。自分のものは何も買わなかったと思います——ああ、ひとつだけ。駅前で、姉とあんみつを食べました。

仕事でいちばん誇らしかった出来事は何ですか？

窓口のお客さまに、畑帰りのおばあさんがいらしたのです。泥のついた大根を新聞紙にくるんで、よく私にくださいました。あるとき、そのおばあさんが「あんたの顔を見ると安心する。うちのお金は、あんたに任せた」と言ってくださって。

大きな表彰をいただいたわけではありませんが、あの一言が、私の勤め人生でいちばんの勲章です。大根も、ありがたかったですけれど。

仕事でいちばん大変だった時期はいつですか？ どうやって乗り越えましたか？

暮れの窓口は、それはもう戦場でした。師走の二十九日、閉店してから帳尻が十円合わず、支店じゅうで夜中まで伝票をめくり直したことがあります。見つかったときには、みんなで万歳をしました。たった十円で大の大人が十人、万歳です。

大変でしたが、いま思い出すのは、そのあとに課長がとってくれた熱いおそばの味ばかりです。つらいことは、不思議と味の記憶に化けるものですね。

> 働き方が大きく変わった節目はありましたか？

結婚を機に、金庫は退職しました。当時はそれが当たり前の時代でした。仕事はやり切ったつもりでしたが、最後の日に窓口を拭いていたら、涙が出ました。

そのあと、子どもたちに手がかからなくなってから、近所のスーパーでレジのパートを十五年ほど。そろばんの指は、レジでもずいぶん役に立ちました。「佐藤さんのレジは早い」が、ちょっとした自慢だったのですよ。

第四章

一本の傘

配偶者との出会いはどんなふうでしたか？

主人との出会いは、お見合いでした。勤め先の支店長の奥様のご紹介です。五つ年上で、電機の会社に勤めているという人でした。料亭で顔を合わせたものの、私は緊張して、ほとんど何も話せませんでした。

ところが帰り際に雨が降り出して、主人が駅まで、傘をさしかけてくれたのです。ただ、それだけの人。でも、まじめな人だと思いました。

初めてのデートはどこへ行きましたか？

川越の映画館です。何を観たのかは、それが、二人ともまるで覚えていないのです。おかしいでしょう。お互い緊張で、画面どころではなかったのですね。

帰りに喫茶店でクリームソーダをいただきました。主人は「コーヒー」と言ったきり、また黙ってしまって。無口な人と石橋を叩く私ですから、さぞ静かなデートだったろうと思います。それでも帰り道、「また会ってもらえますか」と。それだけは、はっきり言う人でした。

> プロポーズはどちらから、どんな言葉でしたか？

三度目に会った日です。主人が急にあらたまって、「贅沢はさせてやれませんが、雨の日に傘を持って迎えに行くことなら、一生できます」と。

お見合いの日の、あの傘のことを言っているのだと分かりました。気の利いた言葉ではないのかもしれません。でも、この人は一生こういうことを守る人だと思って、「はい」とお返事しました。実際、その通りの人でしたよ。

> 結婚式の日のことを教えてください。

昭和四十五年の秋、川越の式場で式を挙げました。その日も、あいにくの雨。母が着付けてくれた白無垢に、綿帽子が重かったこと。そして、ふだん何も言わない父が、お開きのときに泣いていたこと。あの光景は、忘れられません。

あのときの写真は、いまも茶の間に飾ってあります。

> 夫婦げんかはしましたか？ 仲直りの方法はありましたか？

喧嘩らしい喧嘩は、あまりしたことがありません。なにしろ主人は怒鳴るということをしない人で、腹が立つと黙ってしまう。私も意地になって黙る。そうすると家の中がしいんとして、子どもたちが「今日は静かだね」と顔を見合わせるのです。

仲直りの合図は、翌朝の味噌汁でした。私が黙って主人の好きな豆腐とわかめにする。主人は黙って二杯おかわりをする。それでおしまいです。言葉のない夫婦の、言葉のない仲直りでした。

第五章

母になって

子どもが生まれた日のことを覚えていますか？

長男の誠は、昭和四十六年の八月に生まれました。暑い日で、産院の窓からは、蝉の声が聞こえていました。

三年おいて、長女の恵美が生まれました。二人とも、安産でした。

子どもの名前は、どんな思いを込めて付けましたか？

誠は、主人が「誠実の誠」から選びました。嘘をつかない子になってほしい、と。画数の本を会社の昼休みに読んでいたそうで、あのまじめな人が辞書と首っぴきになっている姿を思うと、いまでも笑ってしまいます。

恵美は「恵まれて美しく」。こちらは私が押し通しました。名前のとおり、人に恵まれる子に育ったと思っています。

子育てでいちばん大変だったことは何ですか？

誠の喘息です。小さいころは季節の変わり目のたびに発作を起こして、夜中に背中をさすりながら、何度も朝を迎えました。おぶって夜道を医院へ走ったことも、一度や二度ではありません。

小学校に上がるころには丈夫になってくれましたが、あのころの夜の長さは、母親にしか分からないものだと思います。いまでも季節の変わり目には、四十を過ぎた誠に「調子はどう」と聞いてしまいます。

> 子育てでいちばん嬉しかった瞬間はいつですか？

大きな出来事より、小さな場面ばかり思い出します。恵美が初めて「おかあさん」とはっきり言った日。誠が運動会で転んで、泣かずに立って走り抜いた日。二人が縁側で頭を寄せて、一冊の漫画を読んでいた昼下がり。

嬉しかった瞬間と聞かれて出てくるのが、こんな何でもない場面ばかりなのですから、子育てというのは得なものです。

> 子どもに作った思い出の料理はありますか？

わが家の味といえば、コロッケでしょうか。揚げたてを待って子どもたちが台所に並ぶものですから、いくつ作っても足りません。運動会のたびに作った、いなり寿司も思い出の味です。

恵美はいまでも、帰ってくるとコロッケをリクエストしてくれます。もっとも、味はもう、恵美のほうが上手かもしれませんが。

> 子どもが巣立ったとき、どんな気持ちでしたか？

誠が就職で家を出た日は、平気な顔で送り出して、夜に誠の部屋を掃除しながら泣きました。机に、私が昔持たせた弁当箱がしまってあったのです。

恵美のときは、もう慣れたつもりでいたのに、やっぱり駄目でした。しばらくは四人分のごはんを炊いてしまって、主人と二人、黙って食べたものです。寂しさというのは、お米の量に出るのですね。

第六章

テレビがやって来た日

家に初めてテレビが来た日のことを覚えていますか？

わが家にテレビが来たのは、東京オリンピックの少し前でした。父が奮発したのです。それまでは近所の電気屋さんや、お向かいの家で見せてもらっていました。みんなで紅白を見た記憶があります。

オリンピックの開会式の日には親戚中が集まって、テレビの前はすし詰め。バレーボールで日本が勝ったときには、近所じゅうから歓声が聞こえてきました。

若いころの「憧れの暮らし」はどんなものでしたか？

電気洗濯機のある暮らしです。母は冬でも冷たい水で、たらいと洗濯板で家族六人分を洗っていましたから。「三種の神器」という言葉がまぶしくて、電気屋の店先の洗濯機を、姉とためつすがめつ眺めたものです。

結婚して初めて洗濯機を使った日は、脱水された洗いものを持ったまま、しばらく立ち尽くしました。母に使わせてあげたかった、というのが先に立ちましてね。

昭和の暮らしで、今はなくなってしまったけれど懐かしいものは何ですか？

蚊帳です。夏の晩、青い蚊帳の中に家族で寝転がると、それだけで特別な場所のようでした。蛍を放して怒られた兄がいます。

それから、紙芝居屋さん。水あめを買わないと前列で見られないきまりで、お小遣いのない日は、うしろから背伸びをして見ました。ああいう、少し不便で、そのぶん皆で寄り合うようなものが、なくなってしまいましたね。

これまでの人生で、世の中の出来事にいちばん驚いたのはいつですか？

月面着陸です。人間が月を歩くのを、うちの茶の間のテレビで見ているのですから。父が「わしは月を眺めて育ったのに、お前たちは月から地球を眺める時代を生きるのか」と言ったのを覚えています。無口な父の、あんなに長い独り言は珍しいことでした。

自然の脅威で記憶に残っている出来事はありますか？

子どものころの台風です。新河岸川が増水するたび、父と兄たちが雨戸に板を打ちつけて、家族で蝋燭を囲みました。停電の晩、蝋燭の

灯で母が影絵の狐を作ってくれて、怖いはずの晩がなんだか楽しかったのを覚えています。

近年では、東日本大震災です。川越もずいぶん揺れました。あの日ばかりは、離れて暮らす子どもたちの声を聞くまで、電話を握ったまま動けませんでした。

> 携帯電話やインターネットが登場したとき、どう思いましたか？

正直に申せば、「私には一生関係のないもの」と思っておりました。それがいまでは、恵美に持たされた携帯で、孫の写真が毎週送られてくるのを楽しみにしているのですから、人間は変わるものです。

初めて画面ごしに孫と話した日は、腰を抜かしそうになりました。未来というのは、いつの間にか茶の間まで来ているものなのですね。

第七章

小さなごほうび

人生でいちばん長く続いている趣味は何ですか？ きっかけも教えてください。

編み物です。嫁入り前に母から仕込まれました。「手が動けば、気持ちは落ち着くものだから」と。その言葉の意味は、子育てのあいだに、いやというほど分かりました。

誠と恵美のセーターにはじまり、いまは孫たちの分を編んでいます。サイズを聞くたびに大きくなっていくのが、嬉しいような、寂しいような。編みかけの毛糸がある限り、退屈というものを知りません。

大好きな歌・音楽は何ですか？ その歌にまつわる思い出はありますか？

若いころは舟木一夫さん一筋でしたが、いまいちばん心に沁みるのは、ひばりさんの「川の流れのように」です。あの歌が出たころ、ちょうど人生の折り返しにいた気がします。

台所で口ずさんでいると、主人が新聞の陰で小さく合わせていることがありました。歌なんて縁のない顔をした人でしたのに。ああいうところのある人でした。

人生でいちばん美味しかった食べものの思い出を教えてください。

新婚旅行で熱海に行ったときの、金目鯛の煮付けです。あんなに立派な魚を丸ごといただくのは初めてで、もったいなくて、骨まできれいにしてしまいました。宿の方に「いい食べっぷりだ」と笑われて、主人まで嬉しそうにしていました。

ごちそうというのは、味の半分が「誰と食べたか」なのだと思います。ですから母のすいとんも、私の中では立派なごちそうのうちです。

これまでの旅行でいちばん心に残っている場所はどこですか？

還暦の年に、恵美が京都へ連れて行ってくれました。修学旅行以来、四十年ぶりの清水の舞台です。

「いつかもう一度」と思っていた場所に、あのとき手を引かれて歩いた娘と、今度は並んで立っている。景色より先に、そのことに涙が出ました。恵美は「お母さん、景色を見てよ」と笑っていましたけれど。

> 自分への「ごほうび」といえば何ですか？

あんみつです。初任給の日に姉と食べてから、私の中でごほうびといえば、ずっとあんみつなのです。

いまは駅前の甘味処もなくなってしまって、もっぱらスーパーのカップのあんみつですが、これがなかなか馬鹿にできません。誰にも言わずに、お昼のあとにこっそりいただくのが、いちばん美味しい食べ方です。

第八章

人生の節目に

人生でいちばん大きな決断は何でしたか？

やはり、結婚です。生まれてからずっと川越の実家で育って、勤めも川越。その私が、家を出る。いまの方には笑われるかもしれませんが、当時の私には、海を渡るほどの決断でした。

荷物を運び出す朝、母が「なんとかなるもんだよ」と背中を叩いてくれました。その通り、なんとかなりました。あの人と一緒でしたから。

これまででいちばん嬉しかった出来事は何ですか？

これまででいちばん嬉しかったのは、初孫が生まれた日です。平成十年のことでした。誠からの電話を受けて、主人とふたり、何度も「よかったなあ、よかったなあ」と言い合いました。

自分の子どものときとは、また違う嬉しさがあるのですから、不思議なものです。

人生でいちばん辛かった時期を、どうやって乗り越えましたか？

主人が大きな手術をしたときです。還暦を前に胃を悪くして、三月ばかり入院しました。あの無口な人が病室でいっそう無口になって、私は毎日、病院まで四十分の道を通いました。

支えは、些細なことでした。恵美が毎晩くれる電話。誠が黙って冷蔵庫を埋めていってくれたこと。それから、病室の主人が退院の前の日にぽつりと言った「もう一度、傘を持って迎えに行かんとな」という一言。この一言で、ぜんぶ報われました。

「自分の人生はこの一言に支えられた」という言葉はありますか？

母の「なんとかなるもんだよ」です。

嫁ぐ朝も、誠の喘息の夜も、主人の入院のときも、心の中でこの言葉を唱えてきました。根拠なんて何もない言葉です。でも母が言うと、本当になんとかなる気がした。そして実際、なんとかなってきたのですから、たいした言葉です。今度は私が、孫たちに言ってやる番だと思っています。

第九章

あなたへ

いま、毎日の楽しみは何ですか？

朝のラジオ体操と、庭の花に水をやること。それから、恵美が携帯に送ってくれる孫の写真です。週の半ばに届くことが多いので、水曜日あたりから、つい携帯を気にしてしまいます。

それと、この一年は、土曜の朝にこの質問のメールが届くのが楽しみでした。正直に白状しますと、金曜の晩から「明日は何を聞かれるかしら」と考えていたのですよ。

これからやってみたいこと・行ってみたい場所はありますか？

桜の時期の京都へ、今度は家族全員で行ってみたいのです。主人と、誠の一家と、恵美の一家と、みんなで。清水の舞台は三度目になりますが、あの場所は、行くたびに連れの顔ぶれが増えていくのが自慢です。

それから、編み物をどこかの誰かに教えてみたい。公民館の教室の貼り紙を、このごろ立ち止まって眺めています。

子どもたち（家族）に伝えておきたい、わが家の味・レシピはありますか？

ぬか床です。母から分けてもらった種を、かれこれ五十年つないでいます。コロッケは恵美がもう覚えましたから、あとはこのぬか床さえ渡せば、私の台所仕事はひと通り引き継ぎ完了です。

こつは、面倒がらずに毎日かき混ぜること。手を入れた分だけ応えてくれるのは、ぬか床も、家族も同じです。

子どもに「これだけは伝えたい」ということは何ですか？

たいしたことは言えませんが——体がいちばんの元手です。無理をしないで、ごはんをちゃんと食べてください。それから、きょうだい仲良く。伝えたいのは、それだけです。

孫やその先の世代に残したい言葉はありますか？

「困ったときはお互いさま」。母の口ぐせで、うちの家訓のようなものです。

人さまに助けてもらったら、いつか別の誰かを助けて返せばいい。そうやって世の中はぐるぐる回っているのだと、ばあちゃんは思いま

す。それから、もうひとつ。「なんとかなるもんだよ」。この二つがあれば、たいていの人生は渡っていけます。

家族への感謝の気持ちを、言葉にしてみてください。

あらたまって言うのは照れくさいのですが、主人と、誠と、恵美と、孫たちに。ありがとう。こんな質問に一年つきあってくれて、この本を作ってくれたことも、ありがとう。

いい人生だったと思います。——まだ、終わりではありませんけれどね。

この一年、質問に答えてみてどうでしたか？ 最後に自由に一言お願いします。

はじめは、私の話なんて本にするほどのものではないと思っておりました。それが毎週ひとつ答えるうちに、忘れていた縁側や、父のかんな屑や、雨の日の傘が、次々と戻ってきて。歳をとるのも、思い出す楽しみが増えることなのだと、初めて思えました。

恵美へ。この贈り物は、お母さんの一年を、ずいぶんにぎやかにしてくれました。この本はいつか、あなたたちのところへ帰る本です。ときどき開いて、笑ってやってください。

付 録

文 体 見 本

本文は「です・ます」調で整えています。参考として、第二章の一問を「だ・である」調で整文した場合の見本を掲載します（納品時はどちらかの文体に統一します）。

> 十代のころ、夢中になっていたものは何ですか？（だ・である調）

十代のころ夢中になったのは、舟木一夫だった。「高校三年生」が大流行し、私はラジオにかじりついて聴いた。レコードなど買えるはずもなく、姉と二人、歌詞を紙に書き写して覚えたものだ。学校でも、みんなが歌っていた。

一本の傘 ― 佐藤文子のあゆみ

二〇二六年七月　発行
編集・発行　自分史レター（jibunshi-letter.com）

本書は仕上がり確認用の見本です。全52問（基本プランの一年分）を収録しています。登場する人物・出来事はすべて架空のものであり、実在の人物・団体との類似は偶然です。
本文の著作権はご家族に帰属します。自分史レターが本文を他の目的に利用することはありません。